



© Yuki Nakase

42丁目の夜

五千ドルと五十万ドルに 共通する問題

フリーランスの照明家としてニューヨークで請け負う照明業務は、演劇、ミュージカル、舞踊、イベントのデザイン、アソシエイト、アシスタント、ドラフティングとレンダリングが主な業務内容です。演出家からの指名とほかのデザイナーからの紹介で仕事を頼まれることがほとんどで、雇い主は非営利組織、学校、商業的興業とさまざまです。プロダクションの規模も、美術照明予算が5,000ドル以下というものから500,000ドル以上というものまで幅広く、仕事の規模に応じて挑戦することの種類が変わってきます。そんな環境の中で最近ふと気付いたことは、仕事の種類と規模に関わらず現場で問題になることに共通点があることです。

ここ1か月内に関わった作品の中で共通して困難であったのは、美術デザインの情報収集です。そのうちの一件を例にあげると、私たち照明デザインチームが得たのは美術平面図のみで道具帳はなく、打ち合わせで耳にした断片的な情報をもとに照明のための断面図と立面図を作成する必要がありました。間口6間奥行15間のステージは、全面ガラス張りの床の下にLEDモニターが仕込まれ、その映像は吊られた鏡の天井とステージを取り囲む10本の鏡の柱に反射し、床と天井の間には数十本の木のオブジェが飾られるという美術デザインでした。照明の鏡への写り込みを防ぐためと、木と柱の間をぬって光を設計すること、また装置に天井があることから、図面作成の段階で器材の吊り位置を入念に探る必要があり、美術デザインの詳細が全く不明だったことは死活問題でした。照明チームが唯一許されたことは、可能な限りの器材を持ち込んで物理的に許す限りの量を仕込み、装置に応じて使用する器材を現場で選ぶという手段を取るための予算の獲得です。ステージ周辺だけ

でも約300台の照明器材が吊られ、実際使用したのは半数ほどでした。美術デザインの詳細を照明チームに渡すことだけでどれだけの費用削減になるのか明確なだけに、その情報公開を拒むのには私の想像を超えた理由があるのでしょう。

さらによくある困難は、クライアントが求めるデザインの生み出すことのできるクリエイターが揃っていないのにも関わらず、彼らに自由な創造を許すための予算と組織を持ち合わせていないプロダクションです。夢を現実化するための費用と時間不足によるデザインの削除はよくある話ですが、同じくありがちでもっと厄介なのが、責任者不足です。舞台監督不在、技術監督不在、照明チーフ不在という信じられない状況は照明デザイナーにとってまさに落とし穴です。その穴の中では、予算を割り出すためだけに作成された初期の照明図面が実際に発注され、実際の照明図面ができた頃には変更不可と聞かされたり、劇場から渡された間違いだらけの器材リストに右往左往したり、照明に使う予定だったはずのパイプに道具が吊られているのを見つかけたり、照明デザイナーの創造を踏みにじる負のエネルギーに満ちています。ほとんどの照明作業は完全なるチームワークであり、素晴らしいデザイナー1人雇ってもチーム作りを怠れば良い作品は作れないのに、残念です。

仕事の規模に関わらず、また自身の性別、国籍、年齢と経験年数にも全く関係なく、これらの問題は照明家が直面するであろう問題です。経験とともに事態を事前に発見し防ぐ技術を身につけますが、それらを解決する手間はいつまで経っても同じようです。